中央公論

特別報告 インドシナ難民

9月特大

秘録 原子爆弾日本投下計画

――一九四五年米国目標地選定委員会の記録――

なぜ広島、長崎だったのか。東京、京都、新潟、小倉などの諸都市は目標に擬せられながらなぜ原爆をまぬかれたのか。貴重な史料を渉猟して発掘された三十四年目の真実

オーテス・ケーリ
（同志社大学教授）

「救われた京都」の伝説

「原爆投下目的地の、もっと細かいリストには、広島、小倉、新潟のほかに日本の寺院都市京都も入っていた。日本研究家のライシャワー教授は当時陸軍情報部に勤務していたが、これを聞いて、情報部長アルフレッド・マコマック少佐の事務室に跳びこんで、衝撃のあまり泣き出してしまった。そこで教養もあり、人道家でもあったニューヨークの弁護士マコマックは、陸軍長官スティムソンに頼んで、京都をこのブラックリストから消してもらうようにしたのである」（ロベルト・ユンク著、菊盛英夫訳『千の太陽よりも明るく』）

日本では、第二次大戦末期に京都を爆撃から救った恩人は、ハーヴァード大学のフォッグ美術館のラングドン・ウォーナー博士であったという伝説が相当根強くゆきわたっているが、西洋側から右のような資料が提供され、親日家の元駐日大使ライシャワー博士の名前が何年か前に恩人としてあがってきた。

この短い文章には二、三の誤りが含まれているが、まったくの作り話であるとはいえない。たしかに京都を爆撃の第一目標地、さらに一般の爆撃地のリストからはずしたのは、H・L・スティムソン陸軍長官であった。そしてスティムソン氏はウォーナー博士と面識もなく、「京都の文化的意義についてはだれからも教わる必要はこれっぽちもなかった」と自分の回顧録をまとめていたときに助手のマクジョージ・バンディ氏（のちにハーヴァード大学副学長。ケネディ大統領の国家安全保障担当補佐官をへて、フォード財団の理事長をつとめた）

に語ったことは、四年前に私がくわしく発表したところである（『文藝春秋』一九七五年九月号）。

京都が本格的な空襲から救われたことはあまりにも偉大なことで、伝説どころか神話の材料にさえなってしまっている。はじめに掲げたライシャワー教授の逸話だが、これについてはまったくの作り話であるということを私はご本人から口頭でうかがい、また書面でもその証言をいただいている。しかし、このような「美談」はなんと消えにくいことか。どうしてそういうことになるのか、ウォーナー伝説との類似点をあげて説明してみたい。

まず、ウォーナー博士にしても、ライシャワー教授にしても、だれにも負けないと言われるほどの親日家である。両者とも日本語ができ、大学を出てから日本において高度の日本研究をすすめた。そして、それぞれの分野で一生をそれにささげることになった。なお、両者はアメリカのもっとも古くて優秀とされているハーヴァード大学に教鞭を取っていた。そして、それぞれの分野でその上に立つ人がいないくらいに評価されている。

なおウォーナー博士の場合は、夫人がセオドア・ルーズベルト大統領の姪にあたる人だったので、電話一本でフランクリン・ルーズベルト大統領（ハーヴァード大学での同窓でもあった）にものが言えたはずだったと考えられやすい。ウォーナー博士は永眠の日にいたるまで、自分が京都の恩人だということを否定し続けてきたが、否定すればするほど肯定とられていったようだ。

彼が亡くなった一九五五年六月十二日には、日本の三大新聞の「天声人語」、「余録」、「編集手帳」が、そろって名文で、博士の死を惜しみ、その業績をほめたたえた。そして、まもなく勲二等瑞宝章が贈られることになった（これは、外交官以外の外国人が日本国からもらえる最高のものである）。

しばらくたってから、奈良の近くの、日本でもっとも古いといわれる法隆寺に近い小高い丘の上に、ウォーナー博士を記念する石碑がおかれることになった。くわしい説明の中に「奈良と京都を戦火の犠牲にならないよう最善の努力をしつづけた。これは、博士自身の否定にもかかわらず、疑うことのできない事実である」とある。ハーヴァードのフォッグ美術館にある博士の肖像画の下には、日本語で略歴が書かれており、最後が次のことばでしめくくられている。「第二次大戦中、米軍の京都奈良爆破をやめさせたのは彼の進言によるとされている」

この二つの文章のいずれにしても、最後的な、断言的な証拠ではないにもかかわらず、根強くウォーナー伝説は日本で生きつづけていることを物語るのである。そろっている条件が良すぎるのだろうか。あるいは、千年の都であり、日本人の心の故郷と言われ、世界の京都とまでなっている京都があまりにも日本人には重大なので、神秘に近い伝説でもってしか把握したくないのだろうか。

一方、ライシャワー伝説も完全には消えていない。私がはじめてそれを知ったのは、米国独立二百年を祝して、日米間の諸問題について両国から参加者が富士山の麓に集まって論じた国際学会においてであった。

ライシャワー博士がそれに参加したわけではなかったが、ちょうど私のアーモスト大学の後輩にあたる人が、私のスティムソン長官に関する研究に興味を示し、次のような話をしてくれた。彼はハーヴァード大学の大学院のときに、ライシャワー博士の果したといわれる役割を「第二次大戦――インテリと平

和」と題する「歴史169――一七八九年以後のアメリカ思想史」の講義で、担当者のドナルド・フレミング教授から聞いたというのだった。この講義は、一九六二年の四月十八日がはじめてで、のち数年繰り返されたそうだ。つまり、涙ながらに上層部にアピールしようとしたインテリの一人としての、ライシャワー博士の平和的役割が思い出されたのであった。

さいわいその話を聞いたすぐのちにハーヴァードでライシャワー教授に会うチャンスがあったのだが、その前にフレミング教授をつかまえようとした。電話でしか話すことができなかったが、彼は『タイム』誌か『ニューヨーク・タイムズ』に当時のっていたので、資料として大丈夫のはずだと言って電話を切った。

ライシャワー教授のほうはもっと親切に、これは多分あの『千の太陽』から出たデマじゃないかと思うが、自分が原爆のことを知ったのは、八月六日の、広島に投下されたという発表のわずか数時間前のことだったと説明してくれた。それを聞いたのはマコマック（少佐でなくて大佐だったのだが）からだった。自分の直接の上司には違いないが、それまでの話である。

のちほど、書面でくわしいきちんとした説明がライシャワー教授から届いた。それには『千の太陽』の話はメロドラマ式だとまで書いてあった。

伝説を正すことは関係者が生き残っている間でも大変なことであり、であってほしい話があまりにも簡単にであった話になりやすい。とくに、戦争とか軍事機密とかというものが相手である場合はそうである。ライシャワー教授は別の手紙の中で、スティムソン長官には一度も直接会って話したこともない、と書いている。

副大統領も知らぬ「計画」

ここで私は伝説から離れて、この問題をできるだけ違う角度から解いてみたいと思う。

一九四四年十二月三十日に、原子爆弾のできあがるであろう予定日がはじめてアメリカの最高首脳部に報告された。それは一九四五年八月一日以降、ということだった。そして春が深まるにつれて、B29による日本の空襲がだんだんはげしくなっていった。

第二次大戦中の陸軍省には、陸軍長官としてヘンリー・L・スティムソン氏、参謀総長としてジョージ・C・マーシャル元帥がいた。スティムソン氏はこのころ七十七歳だったが、四十代に二年近く同じ陸軍長官をつとめたことがあった。彼は弁護士あがりで、職業軍人ではなかった。文官が軍人の上に立つというアメリカ政府の成り立ちと建て前があり、スティムソンとマーシャル元帥はその意味で良い協力態勢を組んでいた。

スティムソン長官は、政治の面をとくにカバーしていたので、マーシャル元帥は作戦と指揮のほうにもっぱら熱中し、しかもよくスティムソン長官の理解を得るよう気をくばっていた。原子爆弾の製造に乗り出すことを決めたのはルーズベルト大統領だったが、大統領はそれをすっかり陸軍省に委ね、これがスティムソンの直轄になり、「マンハッタン計画」という名の煙幕のもとにすすめられたのであった。したがって陸軍長官は原爆の製造のみならず、投下目標地の選定についても最終的な権限を持っていたのである。

五月三十日にはじめて、京都を目標地から除外せよというスティムソン長官からの命令

がおりた。これを立証するのは、マンハッタン計画の司令官レズリー・グローヴズ少将からノースタッド少将を経由して空軍総司令官のアーノルド大将にあてた極秘のメモである。それは次のような短いものであった。

「ノースタッド少将あてのメモ。今朝陸軍長官と参謀総長とはわれわれの選んだ三つの目標地、とくに京都、を承認されなかったことをアーノルド大将に伝達されたし」。メモの余白には手書きで「承知、了解、ノースタッド」とある

なぜグローヴズ少将からこのようなメモが出たかについては、説明がいる。当然のことながら、原子爆弾関係の政策的な事柄は最高の機密として扱われていた。理由はいろいろあるが、常識的なもの以外には、原子爆弾がどのようなものになるか、なかなか見当がつかないからであった。なお、ドイツがやりかけようとしていたことがわかっていただけに、どちらが先に造るかという競争にもかかわりがあったと考えられた。

乱暴な言い方かもしれないが、造る以上は当然使うのである。これが造る建て前に含まれていた考え方であることは、中心人物であったオッペンハイマー博士やコナント、ブッシュ両顧問の、のちに一致した言葉であった。早く戦争を終わらせ、少しでも多くのアメリカ兵の生命を救うことが、ルーズベルト、トルーマン両大統領をはじめとする上層部が、たえず念頭においていたことであった。

グローヴズ少将の回顧録には次のような文章がある。

「参謀総長のマーシャル元帥と、原子爆弾のすすみ具合について、完成予定日をも含めて話し合っていたところ、実際の投下計画の準備にそろそろ入らないといけないのではないかということになった。原子爆弾を実際効果的に利用できるという確信はなかった。参謀本部の作戦部将校のだれかを指名してもらい、その人との連絡の下に自分が投下計画を作れるようにしてほしいと願い出た。マーシャル元帥は、ちょっと間をおいて次のように答えた。『あまり多くの人をこのことに関係させたくない。これを君がひきうけて実行に移してくれることのできない理由があるのか』と。私の『いいえ、ありません閣下。そのように進めます』という言葉をもって、この場面が終わった。この命令以外に何の命令をも受けなかったし、またその必要もなかった」

「マーシャル元帥のこの件に関する立場は私にはまったく意外だった。私たちの仕事に関する知識をできるだけわずかの人数に限っておくべきだという意見はよくわかり、私も事実賛成であった。なお、元帥が投下作戦に技術的な問題を十分に理解できない作戦部将校をまき込むことはあまり賢明でないと考えていたことも、十分認識できた。にもかかわらず、実際の投下作戦を、作戦部からすっかり切りはなしておきたがる元帥の考えは、私にはとても想像できなかった」

上層部はこれほど気を使って、彼らの機密を文章や言葉にしなかった。実際の目標地がどのような条件の都市であるかということを、マンハッタン計画内では、このころいろいろと議論していた。まず、前からあった軍事政策委員会で、主に技術的条件の話がなされていた。そして、右のマーシャル元帥の命令によってできたのは、もう一つの目的をもった委員会、すなわち目標地委員会であっ

た。それらは、一九四五年四月十二日のルーズベルト大統領の死後、ますます盛んに会合を重ねることになった。

いかに最高上層部がマンハッタン計画を秘密にしていたかということは、副大統領のトルーマン氏がルーズベルトの死の直後就任の宣誓をした段階では、まだ原爆の計画をまったく知らされていなかったということが物語っている。

就任式の後、ひっそりとした雰囲気の中で、スティムソン長官は、閣僚が閣議の部屋から新大統領と握手しながら出て行くのを待って、最後の一対一になったところでかいつまんだ報告をし、のちほどくわしい専門的な報告に来ますと述べたのであった。

では、軍事政策委員会と目標地委員会がどのようにマンハッタン計画の中で動いたかを辿ってみよう。

東京はもう焼けてしまっている

はじめて目標地の話がでたのは、一九四三年五月五日、マンハッタン計画の軍事政策委員会においてだった。話の主題は原爆の燃料の生産についてであったが、最後に次のような記録がある。

最初の〔原子〕爆弾の使用について論じられた。トラック島の軍港に集まっている日本の艦艇に対して使用することがいちばんよいというのが、大体の意見だった。スタイヤー少将は東京はどうかと言ったが、原爆は万一不発になる場合、簡単には引き揚げられない程度に十分深く水中に落下するような場所で使用すべきだ、という指摘がなされた。日本人ならばドイツ人ほど適切に不発弾から知識を引き出さないであろうという理由から、日本が選ばれた。

このように、東京と、日本海軍の大基地があったサンゴ礁のトラック島がまず目標地にあがったのであるが、本格的な話に入るのにあと二年もかかった。

一九四五年の春ごろになると、写真解読の技術が大きな役割を果すようになった。日本の上空をほとんど自由自在に飛んでいたB29は、両翼につけたカメラで写真を二枚ずつステレオ式に撮っていった。これをこまかくひきのばし、二枚ずつ同時に映し出すと、高度の上空から写したにもかかわらず、立体的に、驚くほど鮮明に、日本の都市や交通機関の状況がわかるのであった。この技術は第二次大戦が生んだ専門技術の一つだった。この技術を目標地委員会が利用することになった。

私も第二次大戦中、B29が写した写真の解読を専門家から頼まれて、そのような立体写真をハワイで日本の捕虜に見せ、捕虜の解釈を聞いたことがあった。自分の出身地の写真が立体式に大きくひきのばしてあり、自分の家とか近所の風呂屋の煙突とかが、あまりにもはっきり出ているので、捕虜が驚いてしまったことが何回かあった。

目標地委員会は一九四五年四月二十七日、ワシントンにおいて第一回の会合を開いた。技術的なことがおもな内容であったが、目標地として出て来たのは北九州の八幡製鉄、下関（シムノセキとミス・スペルしているが）と東京が記されている。なお、具体的には次のような記録が残っている。

(1) 広島は第二十一爆撃隊の優先リストにのっていない、最大の無傷の目標地であ

る。この町を考慮に入れること。

(2) 八幡（やわた）は考慮に入れるべき地域である。ただし八幡はUA一、また優先リストA（鉄鉱産業）に入っている。

(3) 横浜はUA二、目標地優先リストCに入っているため、優先リストでは低位にある。優先リストBであるUA二の横浜の地域を考慮に入れるべきこと。

(4) 東京も可能だが、いまや事実上すっかり爆撃をうけて燃焼し、皇居の地域を残すだけで、事実上の廃墟である。東京は可能性というだけにとどまる。優先リストBに入るUA三の地域はどうか。なお、東京は戦闘機ならびに高射砲によってもっとも厳重に防衛されている地域であることを忘れないこと。

(5) われわれの目標地選定にさいして忘れてならないことは、まず第二十空軍部隊が第一義的には日本のすべての主要都市を破壊する作戦をとっているということ、次に、彼らの観点からして作戦上妨げになるとすれば、重要な主要目標地をわれわれのために残しておこうとするものではないということである。現在までの彼らの手順は東京から爆撃を開始し、飛行機そのもの、生産、組立工場、エンジンの製作所等を爆撃すること、航空機産業を全般的に痲痺させ、第二十空軍部隊の作戦に対する反撃を根こそぎに破壊することである。第二十空軍部隊は何一つ残らないくらいに破壊しつくすという主要目的のもとに、次の諸都市を組織的に爆撃しつつある。

東京、横浜、名古屋、大阪、京都、神戸、八幡、長崎。

データを準備するにさいしての基準は、次のように定められていた。

a 人口密集地の中に、直径三マイルを下まわらない〔円を描きうる〕都市であること。

b 目標地は東京から長崎にまたがる地域にある都市であること。

c 目標地または照準目標は高度に戦略的な価値をもつべきこと。

d 下記の諸地域が研究に値いするものと考えられる。東京湾、川崎、横浜、名古屋、大阪、神戸、京都、広島、呉、八幡、小倉、シモセンカ〔下関〕、山口、熊本、福岡、長崎、佐世保。

e 陸海軍の共同目標地選定グループは上記の十七地域のうちで、すでに破壊されている地域を除外すること。

第二回と第三回目標地委員会は場所を変えて、マンハッタン計画のロバート・オッペンハイマー博士のニュー・メキシコのロス・アラモス研究所の中で開かれた。五月十日と十一日のことである。議題は次のとおり。

A 爆発の高度
B 天候の報告と作戦計画
C 機械仕掛〔原爆〕機外投棄と着陸方法
D 目標地の状態
E 目標地選定にさいしての心理的要因
F 軍事目標に対する使用
G 放射線効果
H 他のB29との共同作戦
I 模擬演習
J 航空機の安全のための戦略的要件
K 第二十一計画〔マリアナに配属の空軍〕との共同作戦

第一目標は京都、広島

第二次大戦当時、米国の空軍は陸軍の一部であった。陸軍長官のもとに空軍次官をおき、H・A・アーノルド大将が作戦の指揮に当っていた。B29の基地はマリアナ群島にあり、第二十空軍と呼ばれていた。その下に第二十一爆撃部隊があり、その下部組織の一つは五〇九部隊であって、これが何ヵ月間かの原爆投下の特別訓練を受け、さらにマリアナの基地から日本上空へ飛来して模擬演習を行なっていたのであった。

前述のD、E、Fの説明は次のとおりであった。

六、目標地の状況

A〔J・C〕スターンズ博士は目標地選定に関する自分の課題について報告した。彼は以下の諸条件――(1) 直径三マイル以上の円を描きうる都市の中の重要目標地であること。(2) 爆発によって効果的に破壊しうるものであること。(3) 次の八月までに攻撃されないはずの地域であること――をもつ、可能な目標地を概観してみせた。スターンズ博士は、不測の状況が起こらない限り空軍がわれわれの使用のために留保してくれそうな五つの目標地のリストを示した。それは次の通りである。

(1) 京都。この目標地は人口百万の都市産業地域である。日本の旧首都で、いまや他の地域が破壊されたために、多くの人口と工業がこの地に移りつつある。心理的観点からすれば、京都の利点は、日本の知的な中心地であること、故に京都の人はこの機械仕掛のような武器の意味が一層よくわかるだろうということである。(AA級目標地)

(2) 広島。これは都市産業地域のまん中にある重要な陸軍の物資貯蔵所であり、海外派兵出港地でもある。レーダー向きにもってこいの目標地で、町の大部分が広範囲にわたって破壊されそうな大きさである。隣接して山があるため、爆風による破壊を相当強め、集中効果をもたらすであろう。河川地帯にあるため焼夷爆撃には不向きである。(AA級目標地)

(3) 横浜。この目標地は今までのところ手をつけていない重要な都市産業地域である。産業としては航空機製造、機械器具、ドック、電気製器、製油所などがある。東京に対する破壊がふえるにつれて、工業は次々に横浜に移ってきた。不利な点は、これがもっとも重要な目標地域でありながら海で仕切られていることと、日本でもっとも堅い高射砲陣地が集中していることである。われわれにとっての利点は、悪天候の場合、他の目標地からはるかに離れているために、補欠の目標地として使用できることである。(A級目標地)

(4) 小倉の兵器庫。これは日本で最大の兵器庫のひとつであり、周囲には都市産業建物がある。この兵器庫は軽装武器、高射砲、敵前上陸撃退用器具等で重要である。縦四〇〇フィート、横二〇〇〇フィートの広さがある。これは、もし爆弾が適正に投下されるならば爆心の部分は高圧の故に一層堅固な建築物を破壊するのに十分効果をあげうる広さであるし、同時にまた、遠くにある弱い建築物に対しても爆風による相当な被害を及ぼすことであろう。(A級目標地)

(5) 新潟。本州の北西海岸にある港市。他の港市が破壊されるにつれて新潟の重要性が増加しつつある。機械器具の工場があり、

また工場疎開が行われる場合には工場が集まってくる可能性がある。製油所や倉庫もある。（B級目標地）

(6) 皇居に投下することの可能性も議せられた。一致した意見は、われわれとしてはこの案を推奨すべきではないということ、ただしこの爆撃のための措置は軍事政策に関する最高の機関からの発令によるべきこと、であった。この目標に対してわれわれの武器が効果を発揮するかどうかをきめるために、情報を得るべきであるという点で意見の一致を見た。

B　われわれの武器使用の目標地として、この会議の出席者が推奨するのは、はじめの四地点となる。すなわち、a　京都、b　広島、c　横浜、d　小倉の兵器庫。

C　スターンズ博士は下記の措置を取ることに同意した。(1)　これらの事項についてフィッシャー大佐に要約を徹底させること。(2)　これらの目標地が〔通常の爆撃から〕留保されるよう要求すること。(3)　目標地について、それぞれ戦略上の重要産業の正確な位置を含む情報を入手し続けること。目標地に関する写真を更に入手すること。(4)　(5)　建築物、地域、高度、建物の内容と屋根の材料が何であるかを識別すること。同博士はまたデータがふえるにつれて、目標地に関するデータに十分接し続けること、ほかの可能な目標地についても委員たちに引続き知らせることを約束した。また同博士は小規模の軍事目標の位置を確かめることと、皇居に関してもっと情報を集めることについても同意した。

七、目標地選定にさいしての心理的要因

A　目標地を選ぶにあたり心理的な要因がきわめて重要である、という点で意見が一致した。これには次の二つの面がある。すなわち、(1)　日本に対し最大限の心理的効果をあげること。(2)　原爆に関する報道がなされる場合、それの重要性が国際的に認識されるよう、第一回目の投下を十分にすべきましいものとすること。

B　この点からすると、京都の人々は高度に知的であり、故にこの武器の意味が一層よくわかるという利点が京都にはある。広島の利点は恰好の大きさであることと、隣接した山のために集中効果をあげうることであって、市の大部分が破壊されるであろう。東京にある皇居は他のいかなる目標地にもまさる名声をもつが、戦略的にはいちばん価値が少い。

目標地委員会の第四回目は、再びワシントンに戻り、実際に原爆を運ぶ特別訓練をうけている飛行隊長を含めて開かれた。そこでまずきまったことは、「この武器の管理と使用は、第一線の司令官にゆだねるのではなく、ワシントンがそれにあたる」ということだった。長いやりとりの中で、目標地に関しては、次のようなことが話し合われた。

C　スターンズ博士が京都、広島、新潟に関するデータを提出。次の結論に達した。(1)　照準点を定めないこと。これは気候の状況を待って、基地での決定にまかすべきこと。(2)　照準目標として工業地域を選ぶ必要がなくなったこと。なぜならこの三目標地で

はそういう地域は小規模で、町はずれに広がっており、まったくばらばらであるから。

(3) 最初の機械仕掛は選んだ町の中心に投下すべく努めること。つまり、そこを完全に破壊するために、後ほど出来上る機械仕掛一個または二個を再びそこに使う必要がないため。

(4) 高性能爆薬と、原爆の模擬弾が建物に及ぼす効果に関するもっと多くのデータを得ることが望ましい。これらは「機密文書」扱いにすれば、ふつうのルートで伝達してよろしい。

機械仕掛の相対的な効果をより綿密に知るために、爆発効果の研究として、第二十空軍破壊分析グループ（ブラザーズ氏）の報告書を入手すべきことが強調された。スタンズ博士がこの手続を取ることになる。ルメイ中将〔マリアナ基地におけるB29部隊の司令官〕あての指令書には、原爆の模擬弾計画、破壊の評価、主要武器〔原爆〕の安全性についてのパラグラフを含むことになる。フォン・ノイマン博士は、提案されている目標地のもよりの山は遠すぎて、重要な効果を発揮できないであろうことを自分の意見として述べた。ウィルソン博士は、計画で用いられる五psiはきわめて低すぎるのであり、大概の日本の家屋には三psiで十分だという意見であり、そのようにすれば「小僧」〔のちに広島に投下されたウラニウム原爆〕と「太い人」〔のちに長崎に投下されたプルトニウム原爆〕について、より大きな効果が期待できる、ということを繰返し発言した。

スティムソン陸軍長官の信念

目標地委員会がこのようにこまかく検討を進めているうちに、最後の投下に関する政策はより高いレベルで決定されることになった。トルーマン大統領はスティムソン長官が提案した、原子爆弾と原子力に含まれる種々の問題を審議する上部委員会を作る案に賛成し、それを「暫定委員会」と名づけた。ホワイト・ハウス、国務省、陸・海軍、科学技術分野等から代表が出、スティムソン長官が自らその委員長をつとめた。

暫定委員会は何回か会合を開いたが、もっとも重要だったのは、五月三十一日と六月一日の会合だった。そこでは原爆投下の方法のみならず、これをどのように世界に発表すべきかとか、原子力の将来について議会が方針を決めることができるまでの問題をも検討した。産業界の最高のリーダー数名の意見をも取り入れたのであった。

ところで、その前日の五月三十日に、グローヴズ少将からノースタッド大将経由でアーノルド大将あての機密メモがおりた。それは京都はもちろんのこと、広島と新潟の攻撃を認めないことを意味した。このメモはオリジナル以外に二通しかコピーが存在しない。これで、スティムソン長官が京都を目標地として許さないと頑固に頑張ったのは、五月三十日のことだったことがわかる。すなわち、京都は原爆のみならず、あらゆる爆撃の目標地としてはずされたのであった。

スティムソン長官はグローヴズ少将に言った。「今回こそ私が決定権を持つ。この件〔京都を目標地とする〕に関しては私が主役であり、だれからも文句を言わさない」

私は他のところで、スティムソン長官が京都を爆撃から除外したことについて、何回か書いたことがある。マクジョージ・バンディ

氏がスティムソン長官の回顧録をまとめるのを手伝っていたとき、長官が言った言葉を忘れてはならない。バンディ氏は私あての手紙の中で「老スティムソンはラングドン・ウォーナーによって彼の注意が京都にむけられたのではなかったと、はっきりそのことを私に否定しました……彼は京都の文化的な意義についてはだれからも教わる必要はこれっぽちもなかったことを説明しました」と書いている。

グローヴズ少将は、京都に軍需産業の多いことを長官が具体的に知ったとき、京都に対する意見がかわるだろうと最後まで思っていた。そして目標地委員会の委員たちとともに、ポツダム会議まで長官を機密電話で追いかけ、許可をとろうとしたのだが、長官は断固として京都禁爆を譲らなかった。

暫定委員会は長い討論の結果、原爆投下に関する原則を、次のように結論した。(1) できるだけ早く、(2) 「軍事施設または軍需工場で、付近を破壊しやすい家屋その他がとりまいている」ような二重の標的を、(3) 予告なしに「投下する」という、三原則だった。

これは残酷に聞こえるかもしれないが、軽軽しく出された結論ではない。五月三十一日の段階では（ドイツはすでに敗れ、ヒットラーの自殺後三週間がたっていた）まだ原子爆弾は、実際投下したとき本当に爆発するかどうかが確実でなかったからである。予告しておいて爆発しなかったならば、日本の軍部をなおファナティック（狂信的）に刺激する材料になったであろう。また、落とす以上は、その相対的な効果をねらうべきである。詳しく論じあっている間に、このような点が出てくるのであった。

選ばれた目標地

目標地の都市を選ぶ段階が迫った。六月十三日付で次のような機密報告書が出た。

選ばれた目標地

a　小倉の兵器庫は九州の北端、八幡のまつであり、大小の大砲、高射砲、上陸迎撃用その他の軍需品の生産が行われている。兵器庫は縦四〇〇〇フィート、横二〇〇〇フィートの広さにわたり、鉄道敷地、店舗、発電所が近くにある。

b　広島は陸軍のおもな海外派兵出港地であり、海軍にとっては輸送船団の集合地である。地方の師団司令部のあるこの町は、主として四つの埋立地の上に集中している。鉄道の敷地、陸軍の倉庫、海外派兵出港地はこの町の東側にある。機械器具工場、製鉄所、造船所といったいくつかの重工業工場は、都心部から少しはなれたところにある。

c　新潟は日本海に臨む港で、その重要さは増し加わりつつある。アルミニウムの製錬と鉄製品がおもな産業であるが、鉄の方面では機械器具を生産し、日本の車両の一五パーセントを産出すると報じられている。年間一〇〇万バレルの原油をこなす精油所は、全国の精油能力の五パーセントに満たないが、これは海外の原油に依存しない数少い精油所の一つである。新潟はタンカーの寄港地であり、合計約一〇〇万バレルの蓄油能力がある。

除外された目標地

a　京都。この目標地は人口百万の都市産業地域である。日本の旧首都で、いまや他の地域が破壊されたために、多くの人口と

工業がこの地に移りつつある。心理的観点からすれば、京都の利点は、日本の知的な中心地であること、故に京都の人はこの特殊爆弾のような武器の意味が一層よくわかるだろうということである。

なおグローヴズ少将からマーシャル元帥あての六月三十日のメモからわかることは、太平洋方面の両総司令官、すなわち陸軍のマッカーサー元帥と海軍のニミッツ元帥が、この段階でまだ原爆の存在を知らなかったということである。また、目標地の都市がこれでますますはっきりしてくる。

参謀総長への覚え書

日本に投下されるはずの最初の原子爆弾の適当な目標地として、小倉、広島、新潟が一応選ばれたのでありましたが、陸軍長官の指令により、京都は原爆のみならず、あらゆる爆撃の目標から除外されました。

アーノルド大将は第二十空軍部隊に対し、これら四都市は留保されるよう、第二十空軍部隊によって攻撃されないように、必要な指令を発しました。

太平洋方面における最近の展開と、とくに沖縄に極東空軍部隊が配置されたことにかんがみ、マッカーサー元帥と現地の海軍の指揮官に対し適切な指令が発せられることが不可欠であると考えられます。この件はキング元帥の幕僚長には伝えてあり、幕僚長からは、キング元帥がニミッツ元帥との間の議題にするよう約束を得ています。

上記の四都市に手をつけないよう、ただちにマッカーサー元帥に必要な指令を出していただくことが望ましいと考えます。

さらに、この問題が公式的に統合幕僚本部に提出の上で承認をうけ、目標地の留保についてまったく誤解の起こりえないようにしておくことが望ましいと思います。

米国陸軍少将　L・R・グローヴズ

京都への執着

七月二日に京都に関する詳しい資料が提出された。これでスティムソン長官も京都を目標地にせざるをえないだろうとグローヴズ少将が思っていた文書である。

一、この覚え書は、京都市内および京都周辺における工業の発展に関する情報を提供するものである。すでに工場地域として二六四四万六〇〇〇平方フィートがその内容とともに確認されている。他に一九四九万六〇〇〇平方フィート分の工場地域が認められるが、その内容は未確認である。確認ずみの部分の中で、新しくて重大なものは航空機エンジン工場であり、月産四〇〇台と推定され、日本では二番目に大きいものである。この工場は合計七四〇万七〇〇〇平方フィートの構内に、屋根つきの部分二四七万一九〇〇平方フィート分をもつ。

二、軍需産業目標の位置

a　京都の主たる重要さは、道路、鉄道の両者について、大阪と東京の間にあることである。主要な貨物駅構内は合計四〇〇万平方フィートあり、その東約一マイルのところにある中央駅は約一七〇万平方フィートの場所を占めている。

b　京都の工場は機械器具、正照準の火器、航空機の部品を生産する（構浜兵器庫の下請け業者である島津製作所の三工場は二四七万平方フィートを占める）。無線による発射指揮装置や照準発射装置も造られている。

c　鉄道駅の南九〇〇〇フィートの範囲内にあるのは
日本電池の二つの工場　二二万八〇〇〇平方フィート
寿重工業の二つの工場　二七万九〇〇〇平方フィート
鐘が淵紡績工場　三二万九〇〇〇平方フィート
他にいくつかの未確認工場
d　貨物駅の北部、西部五〇〇〇フィートの範囲内にあるのは
大型ガスタンク二組　一三四万二〇〇〇平方フィート
寿重工業の工場　八万九〇〇〇平方フィート
奥村電気の工場　一〇九万平方フィート
化学薬品の工場　三五万五〇〇〇平方フィート
e　上記第一パラグラフで述べた航空機エンジン工場は、京都駅の西約二マイルの地点にある。
f　大きな辻紡績工場（一二万八〇〇〇平方フィート）は御所の南西二分の一マイルの地点にある。
g　平和時の産業が軍事目的をもつものへと転換してきた。たとえば漆器工場が爆薬工場に、レーヨン工場が硝化綿工場になるなど。
三、大学や文化施設は大体において御所の東と北に位置しており、鉄道や工場の地域は大部分が御所よりも南と西にある。
四、構造。典型的な日本の都市である。密集した住宅区域は木造建築の割合がきわめて高く、耐火性の建築物はほんの少しがあちらこちらに散らばっている程度。工場の建築は主として軽材、たとえば石綿や板金を使っている。
五、大きさ。町はほぼ矩形で、南北がほぼ四マイル、東西が二マイル半。南部と南西部にある主要な工場地域は西北から南東にかけて約三マイルにわたり、一マイルの幅でひろがっている。
六、階数。家屋はきわめて低く、三階以上の家はほとんどない。
七、屋根。市内の面積の約四〇パーセントに、屋根つきの家屋がある。

七月十六日は歴史的な日だった。原爆の地上実験がアラマゴードの砂漠の上で成功し、原子時代が始まることになった。ポツダムで集まりつつあった三国首脳会議に行っていたスティムソン長官に、このことはいち早く知らされた。

小倉の身代りとなった長崎

このころ首都ワシントンからマリアナ群島のB29司令部あてに、目標地に関する指令の機密電文が発せられた。捕虜収容所のない都市が望ましかったが、ほとんどの日本の都市に収容所があるので、難色を示している。
次の文章は下書きであるが、グローヴズ少将自身の筆蹟によるつけ加えの部分は（　）で示した。既定の三都市以外に大阪、尼崎、大牟田が出て来る。

既定ノ目標地〔広島、小倉、新潟〕ニ変更ナシ。サレド貴下ノ情報ニ信憑性アラバ広島ヲ第一目標トセヨ。初回ノ爆撃ニハ不適ナルモ、（貴下ノ裁量ニヨリ）次ノ目標地ヲ追加スルコトヲ認ム。大阪、尼崎、大牟田。（コレハ当方デ入手セル情報ニ基ク。追加セル目標地ニ決定ノサイハふぁれるニ相談ノコト）。

ここでファレル代将というのはグローヴズ少将の右腕であって、マリアナ群島の基地に投下指導のため派遣されていた人であった。この原案と、次に整理されたかたちの電文は、ともに七月三十一日付であった。大阪、尼崎、大牟田は、おさえられたかたちになるのだが、ワシントンで補欠の候補地として考慮されたことはあったらしい。

既定ノ目標地ニ変更ナシ。サレド貴下ノ情報ニ信憑性アラバ広島ヲ第一目標トセヨ。当方ノ情報ニヨレバ、ホボイズレノ日本ノ主要都市ニモ捕虜収容所アリ。りすとセル地域カラ正確ナ目標点ヲエラブニアタリ、捕虜収容所ノ位置ヲサケルベク厳重ニ考慮セヨ。

周知のように広島と長崎が原爆をうけたはじめての都市である。長崎が小倉にとってかわったということは、それほどよく知られていない。広島の原爆はウラニウムを用いたものであって、Thin Man（"ほそい人"または"太い人"）と呼んでいたのだが、次の原爆はプルトニウムを使い、Fat Man（太い人）と呼んでいた。

太い方の原爆を積んだB29は、小倉の上を一時間近く旋回したのであったが、観察機としてついて来るはずの三機目のB29が現われないうちに、小倉の上に雲がはり出し、日本のゼロ戦が上って来、高射砲攻撃が始まったため、長崎に行くことになった。そろそろ燃料もきれる心配が出て来た。長崎の上には雲はなかったが、照準の段階で風の計算がうまくいかず、計画よりもいくらか誤まった投下の仕方だったと言われている。投下の後、沖縄に向かい、着陸したときには、四発のエンジンのうち二台が燃料切れで止まっていたのであった。

ポツダムから帰って来たマーシャル元帥あての八月十日付のグローヴズ少将の機密メモに、次のようなものがある。オリジナル以外にコピーは二通しか存在しない。

この次の内部破裂型の爆弾は、一九四五年八月二十四日以後の最初の良天候の日に、目標地に運びうる段取りになっていました。生産に四日分の得をしましたので、最終の部品をニュー・メキシコから八月十二日か十三日に送り出すことができそうです。生産の過程で、また現場への運搬の過程で、または現場に到着後不測の困難が生じない限り、爆弾は八月十七日または十八日以後の最初の良天候の日に投下可能となります。

オリジナルのメモには、マーシャル元帥自身の筆蹟で「8／10／45、大統領自身の直接の許可なしに日本の上空に投下してはならない。G・C・マーシャル」と書かれている。

空軍総司令官であったアーノルド大将あての同じ八月十日のグローヴズ少将の機密メモに、次のようなものがある。

ファレル代将は、もともと広島、長崎、小倉、新潟から成っていた既定の目標地のリストに、東京を加えることを推奨してきました。第五〇九部隊による追加攻撃がなされる前に、追加目標地を選び、それを〔B29の指揮官に〕知らせておく必要があります。

前回の〔長崎〕攻撃のときにでくわしたよ

うな悪天候による危険を避けるために、有視界爆撃のための必要条件をゆるめるよう考えることも可能かと思います。長崎攻撃はもう少しで失敗に終るところでした。

しかし、もうこの段階では、日本ではポツダム宣言の受け入れや、有名な御前会議のドラマがはじまっていたので、これ以上の目標地を必要としなかったことはいうまでもない。八月十五日に終戦の決意がなかったなら、はたしてどうなっていたのか。これは歴史家の間でも引続き議論されていくであろう。

伝説と真実

こうした資料からいろいろな結論が引き出せるだろうが、私は重要であると思う点をいくつか挙げてみたい。

まず、目標地の選択は検討を重ねた上でのことだった。それは技術的にも心理的にも、そして政策的にも考えた上でのことだった。もちろん、そこには未知の面が少くなかった。原子爆弾自体の持つ破壊力と放射能についても、また日本国内の事情についても、わからないことが多かった。事がすんでから、はたやすいが、当時ワシントンが直面していた日本に関する問題は大きかった。

歴史の皮肉の例のひとつは、B29が日本の上空で撮ったさまざまの写真から、アメリカは物理的に詳しく日本の状況を知ることができたが、一方、日本国民の精神的状況、日本国政府の内部の動きの面では、間接的にしか受けとめることができなかったことである。そして外交面では、政府が正式に言ってくることとしかあてにできなかったことも含まれている。言い換えれば、日本の外交上の暗号文を全部読み取っていながら、日本の指導者層の中のハト派の動きを正しく捉えることができなかった。

たとえば、ドイツの場合は、相当なレベルまでの連絡がありえたが、日本の場合はこれは不可能であった。日本が島国であり、なお日本人が単一同種であることにも原因があったと思われる。地下運動やスパイ行為は、日本の場合考えられなかった。仮にそれがあったからといって、原爆投下なしに戦争をすますことができたとは限らない。日本の軍部の一方的な考え方に対して、ハト派の人々といれが不可能だった。アメリカに残されていた道は、武力で破壊し、よりショックを与え、日本自身が何らかの解決をつけることを待つのみだった。

幸運にも、タカ派の主張した一億総玉砕式にいくことなく終わることができたのであったが、広島、長崎なしに可能であったかどうかという議論はいつまでも続くことだろう。あのころ、アメリカの指導者たちは日本国内の状況は想像するより手がなかったということを私は言いたいのである。

また、目標地委員会は皇居を爆撃することをこのころ折々話題にしたが、その考えはだんだん消えていったようだ。オッペンハイマー博士自身は、東京湾という考え方を最初持っていたようである。つまり、東京、千葉、神奈川によって囲まれている東京湾のまん中で爆発させれば、その心理的効果はいちじるしいものであったかもしれない。もちろん天皇のおられる皇居を目標にしていたならば、戦争終結のためのきめ手となった御前会議も持つことができず、戦争の終結も下手に長びき、とても八月、九月に終わるようなことは

なかったであろう。

B29の作戦本部では、年末までに、原子爆弾なしにでも、日本国内のあらゆる都市を破壊できるという見通しをもっていた。もちろん歴史はそのように進まなかったが、このような資料を前にしてみると考えさせられることが多い。

もうひとつの皮肉は、京都の市民に関してのワシントンでの割り出し方だった。京都は大学町であるから、知的レベルが高く、原子爆弾を敵が持ったことがいっぺんにわかり、それがハト派とつながり、終戦を早めることになるだろうと考えた。もちろんこれは、アメリカ側の非常にナイーヴな日本人の割り出し方であり、さらにアメリカ側がいかに原子爆弾をも、また日本の現状をも知らなかったかという証拠になる。

もうひとつの結論は、このマンハッタン計画の秘密がいかによく守られていて、目標地の選定にしても、いかに上層部の限られた人数で決めていったかということである。

つまり複雑で、未知の要素の多い原子力のことから考えると、ウォーナー博士のようなまったくの素人が入りこむ余地はおおよそなかった、ということだ。しかし、日本人の限りない寛容性と善意の精神は、日本の心の故郷である京都をアメリカ人が救ったという伝説を信じたがるところにいま一つの皮肉がある。

スティムソン長官は戦争が終って二年後の一九四七年に、原爆投下に至る経過を綴った文章を発表した。その最後はこのような文章でしめくくられている。

「戦争の顔は死の顔である。死は戦時中の指導者が下すすべての命令に必然的にともなうものである。原爆使用の決定は十万人以上の日本人に死をもたらす決定だった。いくら説明したところでこの事実を変えることはできないし、私は体裁を繕おうとは思わない。この計画は入念に前もって計画されたものであった。しかしそれは、われわれにとって嫌悪を催すことのもっとも少い選択だったのである」（『ハーパーズ』一九四七年二月号）

あの歴史的な八月から三十四年たった現在、このような資料がよびおこす気持は複雑なものである。京都に私が住みついて三十二年にもなるが、私は京都がほとんど無傷で残った理由を京都人として調べるようになった。そのもともとの出来事を調べていくうちに、だんだん深入りして、とうとう救われた都市と、そのために犠牲になった都市のことに入っていった。歴史から学ぼうとする者の一人として、これはけっして軽々しい気持でのぼった坂道ではなかった。

ここで私の頭に浮かぶ言葉は、原爆第一号が一九四五年七月十六日にアラマゴードで実験爆発したときに、あのオッパンハイマー博士がいった言葉である。「いかに俗な言葉でいっても、どのようなユーモアをもってしても、いかに駄弁をろうしてみても、けっして消し去ることのできないなまなましい感じをもって、いまや物理学者たちは罪を知った。そしてこの罪はわれらが永久に失うことのできない知識である」

私は物理学者ではないけれど、一アメリカ人であり、この京都に住んでいる。広島、長崎の犠牲者となった方々の生命を、私はいまここで重ねて悲しみ、冥福を祈るものである。

（カット写真・共同提供）